
異世界召喚モノ

rered

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚モノ

【Nコード】

N5482J

【作者名】

re red

【あらすじ】

いじめられっ子の竹下 吉雄は、本来ならば救世主として召喚されるはずだったが傍にいたイケメン表面優等生だが裏では弱者をいたぶる事を

喜びとする隆二を救世主と誤認した異世界の女神によって

2人ともに召喚されることになる。召還直後、女王、王女、騎士団長にも

隆二の方が救世主であると勘違いされ、吉雄は隆二の奴隷としてあつかわそうになり、思わず反抗した吉雄は救世主を侮辱した犯罪者

として

牢獄に繋がれることになる。

召喚

「きもつ」

「うわコツチ見た」

「まじきしよいよね・・・死んでくれないかなwww」
「触られた・・・うう・・・気持ち悪い・・・」

白い目

罵倒

薄ら笑い

落書きされたノート、教科書

体育の授業ではボールのマト

放課後には取り囲まれて殴られカツ上げ

それが高校生、チビデブサの三拍子揃った
たけした よしお
竹下 吉雄の学校での日常。

小数の弱いものが虐げられ、助けを呼んでも、いじめている大多数が「私たちがそんなことするわけないでしょう!」と外面を良くして主張すれば、教師達は「あの子達がそんなことするわけが無い!」と取り合ってはくれない。内気・醜い・背が低い。マイナス要素を持つものは、ストレス解消のオモチャとして精神的、肉体的に弄ばれるのだ。

放課後、オレンジ色の日がさす教室の中

「この・・・糞野郎・・・」

殴られて痛む脇腹を押さえながら、いじめ集団のリーダー、ふじわら藤原隆二りゅうじ

を涙の浮かんだ目で睨んだ。

「豚が何言ってもわかんねーんだよww」

「うぎっ」

隆二に腹を蹴り上げられた僕はたまらず悲鳴をあげた。

端正な顔立ちにいかにもスポーツマン的な体型、成績優秀、スポーツ万能、生徒会長。

女子にファンクラブまである、まさに一見完璧人間の彼を教師は誰も疑おうとはしない。

「ははっ、まさに豚の悲鳴だなあ」

誰も助けてはくれない、地獄のような毎日。しかし僕は自殺しようなんて考えてなかった。

いつかコイツに復讐してやる・・・。この学校で良い子面して裏で弱者をオモチャにしている奴らに復讐してやるのだと今日も深く誓った。

その時だった。

”うむ、かなり強い魔力反応じゃ。おお、見目麗しい強そうな男子がおるわ！この強い反応は恐らく

この男子からじゃな！女神”ベリアース”の名の元 において魔王から世界を救う者を召喚する！”

どこからともなく女の声が響いてきたと思った途端、隆二を中心として地面に奇妙な光の文様、魔法陣 が浮かび上がった。

「う・・・うわああああ」

その文様に吸い込まれるようにして消えていく隆二・・・。それで終わりかと思いきや、この魔法陣の 吸引力は収まらず、僕まで吸いこんできた。

「くそ・・・毎日毎日糞みたいな人生送ってんのに、なんで隆二のとばつちりなんかうけなきゃなんね ーんだよ！」

それが吉雄の、この世界での最後の叫びとなった。

「おお、リュウジ様、彼が目を覚めましたよ！ うっ・・・改めて見てもなんとまあ・・・」

その忌々しそうな声が目を覚ました時に聞いた一声だった。

周囲はさながら西洋の王宮。豪華な真紅の絨毯に金銀の装飾がなされた柱や王座。天井に仕込まれた十字の天窓から入る白い日の光が更に荘厳さに拍車をかけていた。そこにいる王族・貴族的な人達が、僕を学校の生徒達と同じように気持ち悪そうな目で見ていた。

「こんな容姿ですけれど、彼は僕の友達なんです。」

リュウジはお得意の爽やかな笑みで、あたりを見回す。僕にはどす黒い笑みに見えて鳥肌がたった。

「てめー、リュウジ！ 猫かぶってんじゃねーぞ！」

とあまりにも白々しい嘘に腹が立ち口からつい言葉がでてしまう。

「貴様！ 異界の救世主様に向かってなんという暴言を！！ この聖アークティア王国騎士団長である私の

能力値がこの大陸最高位のBランクなのにもかかわらず、能力値がすべてA+のリュウジ様に対して！

たとえ同じ異世界から来た者と言えど、このミネルヴァ容赦せんぞ！」

軍服を、そのはちきれんばかりの胸で押し上げ、赤髪をポニーテールにしている女騎士が僕の首もとに剣をつきつける。

隆二はこの世界に救世主として召還されてきたらしい。能力値A+がどれくらいすごいのかは分からないけれど、この女騎士の隆二への信奉ぶりから、すごく高いのが分かった。

なんだ結局どこに来ても”ただしイケメンに限る”かよ。最悪だ。

ミネルヴァさん、やめてください！ 彼は突然の事にきつと混乱しているのです！」

「まあ・・・さすが救世主様・・・このような下賤の者に対しても優しいお言葉・・・

このミリアリア、感動いたしました」

とロングの金髪が腰あたりまである王女のような女が、リュウジをウットリ見ながら賛同する。

「ところでこの下賤の者は、いかがいたしましょう？　リュウジ様。」

ミネルヴァがリュウジを見ながら頬を紅潮させながら質問した。

「うーむ、そうじゃな・・・そのようなミニオークのような容姿にさきほどのような無礼な物言いをする者などロクな者ではあるまい。牢獄にでもいれておけばよいのではないか？」
と王様らしき人。

「そ・・・そんな・・・友達ですから、そんなことをされては困ります・・・」

リュウジは困り顔をしながらも、こつちを見るときの目は明らかに笑っていた。

「リュウジ様が、そこまでおっしゃるならリュウジ様の元で仕えさせても・・・」

こんな奴のもとで働かされるなんてとんでもないと思い、

「このクソ野郎の元でこきつかわれるくらいなら、とつとと牢獄でも入れやがれッ！」

そう叫んだ途端、怒りで顔を真っ赤にしたミネルヴァに剣の柄で殴

られ、あまりの痛みに意識が遠のく。

薄れ行く意識の中、目の端にはリュウジの俺をバカにした笑みが移っていた。

召喚（後書き）

はじめまして。

はじめて小説（になってるかな・）らしきものを書かせていただきます。

異世界召還チートというテンプレ系、自己満小説となりますが、ご指摘・ご感想ございましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

牢獄（前書き）

2話目です。

文章を書くのが苦手なためおかしいところがぼろぼろでてきますね；
難しいです。

牢獄

”おい！さつさと起きぬか、小僧！”

忌々しい異世界に来る原因となつた女の声が

僕が目を覚ました時に聞いた一声だった。

薄暗く、湿った空間。

背中から伝わる堅い感触、石の寝台。

どうやら僕は本当に牢獄に入れられたみたいだった。

ミネルヴァに殴られた頭の痛みと石の寝台で寝て痛む体の感触が夢ではないことを再認識させる。

”この救世を司る高位神！女神ベリアース様がこの陰気臭いところにわざわざ来てやっているのだ！感謝せい！”

キンキンと響く少女のような声のほうへ目をやる。

艶やかな紫色の髪をツインテールにした、周囲に光のオーラをまとう強気そうな少女がめんどくさそうに立っていた。

寝ながら話を聞くのは誰に対しても失礼であると思い、僕は起きあがり寝台に座った。

「それでお偉い神様が何かご用ですか？ていうかはやく元の世界に

戻せよ。」

（元の世界も嫌いだけど、肉親と一生会えないのは困る。）

” うむ！いまこの世界は闇の高位神の加護を受けた魔王とそれに従う魔族どもの侵攻によって人間達が滅ぼされそうになっておるのじや。

そこで、この救世の女神たるこのワシが救世主を異世界から選び連れてくることになったのじや。

しかし問題が起きての……。”

そこで一息つくと僕を忌々しそうに

” 貴様のように醜い小僧が救世主だったとは……小僧の力が膨大すぎ、またリュウジにもかなりの力があるから区別できずにリュウジを召還してしまった所、気を利かせた魔法陣が本来、救世主になるべきだった小僧もひきずって来てしまったようなのじや”

「じゃあ隆二に魔王討伐任せて、僕は帰らせてくださいよ」

” いや、それはできん。魔王を倒さん限り戻れないし、能力値A+であつても、かの魔王には敵わぬのじや……。能力値が平均S以上でなければのう。小僧の横に判定機があるじやろ？さつき寝ている間に調べさせてもらったのが、平均SSランクじゃった。ちなみに小僧に触れた汚らしい判定機などいらなので返さなくてよいぞ！”

「それで僕はどうすれば、元の世界に返してもらえるんですか？」

僕は平静を保ちながら従順な態度で質問した。

” リュウジのために陰で魔族討伐を手伝うのじゃ！陰でコソコソ魔王討伐とは小僧、貴様の容姿にピッタリの役目ではないか！ハハハハ！”

「隆二様の手伝いをするためには、力の使い方が分からないと魔王討伐のお役に立てそうにもありません。ん。どうか私に力の使い方と使える仕組みを教えてくださいませんか？」

” むう・・・リュウジのためじゃし仕方あるまい！よからう教えてやるが1度しかいわぬぞ”

女神はリュウジの事を考えたのか、可愛らしい顔を赤く染めた。

” あちらでは人間達の魔力を星から吸収することによって、神々が世界を運営しておるが、こちらの神々は吸収せんでも個々が強い魔力をもっておるのな。吸収せずとも良いのじゃ。だからお主ら異世界人は世界を運営するための膨大な魔力を持ってこちらへ来るから、あの世界の者がこちらに来れば、誰でもこの世界の者よりも強いというわけじゃ。その中でもリュウジと不本意ながら小僧は飛び抜けた魔力量をもっていたというわけじゃそして能力値とは筋力、魔力、耐久、幸運、敏捷のランクを平均で表した値じゃ。他にも固有の能力があつたりもするがのう”

怒りでこめかみを引きつらせながら更に僕は質問をしていく。

「隆二様は能力値A+のことですが、どの程度すごいのでしょうか？」

”ランクにはA～Gまであってな、一般的には農民じゃとF、兵士はD～E、騎士はC～Dじゃの。

Bもあればこの世界では英雄クラスじゃ。まあたまにAを超えた小僧のようなS以上の奴もおるかの。

あとは・・・使い方じゃな　なあに、魔力がSSSSSのお主が念じるだけで、この世界ではなんでも　可能じゃ！SSSSSなど今まで見たこともないぞ・・・。最高神すら凌いでおるかもしれんう。

まあ説明はこれぐらいでよいな、小僧のような醜い者とこれ以上話せば口が腐ってしまうわい。”

ある程度情報を聞き出した僕は、これ以上怒りを我慢する事ができなかった。

「教えてくださりありがとうございます、女神様。」

”うむ！　それではワシの愛しいリュウジのために頑張るのじゃぞ！”

「はは、ご冗談を。爆ぜて死ね、糞女！」

三日月のような形の笑いを浮かべた僕は怒りをこめて念じた。

”つつつ！！???”

救世の女神は悲鳴すら上げることができないまま爆散しこの世界から消滅した。

「ふうー生まれて初めてスッキリした気分だ・・・」

ほがらかな気分になりながら僕は判定機の文字の浮かんだ透明な宝玉を見る。

能力値：SSSS 筋力B、魔力SSSS、耐久D、幸運F、敏捷S

対魔力	SS	狂化	F	****	EX	****	EX	*
***	EX							

称号：神殺し（補正で各数値が30%向上）

「……これはひどい。」

あまりものチート性能に絶句する。

ミネルヴァに簡単に倒されたのはこの異様に低い耐久値のせいかと納得しながら、

文字化けが3つもあることに、判定機が故障しているのではないかと一抹の不安を覚える。

「さて……これからどうするか……」

狭い牢獄の中で一人、堅い石の寝台の感触を羽毛ベットのようふわふわの感触にし、

これからの事に思いをはせるのだった。

脱獄（前書き）

PV2、092アクセスありがとうございます！
お気に入りも10件も入れていただいて・・・。
感謝です！

それでは第3話よければお読みください。

脱獄

僕は救世の女神・・・（名前なんだっけ）を爆殺した後、牢獄を破壊しながら抜け出た。

凶悪犯も収容されていたのかもしれないが、容姿だけで牢に入れるような王族どもだ。

言われない罪で入れられている者が沢山いるだろうし、糞王族が支配する王都の治安等知ったことではない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして僕は王宮へと歩を進めた。

「牢獄が破壊されて囚人が脱走しているぞー！！」

鎧の金属音がガチャガチャと複数聞こえてくる。

僕はかまわず直進する。

広間にでると、高校の全校朝礼にいる人数、多分200人くらいの兵士達が集合していた。隊長らしき女が声をかけてきた

「む、なんだ貴様は！貴様のような子供が何故王宮に……。なっなんと・・・この少年

かわいいではないか！」

「え」??」x200（ヨシオ含む）

「え???とはなんだ！ブルドッグやパグ犬的な感じでかわいいではないか。」

（この世界にもブルドッグやパグ犬いるんだ・・・）

「君、ここから外は危ないからここで待っていなさい！おい、その2人、騒動が沈静化するまで

この少年を守っている！」

そう言つて女隊長は牢獄のほうへと進んでいった。

「なんで俺達がこんな化け物みたいな奴を守らなきゃいけないんだよ……」

人間の言葉話すオークだろこいつ？」

「ひやはは、言ってる。この気持ち悪いのがかわいいとか隊長もどつかしてるよな」

護衛として指定された2人の兵士が僕を見ながら会話を始める。僕を肉親以外で人間扱いしてくれた女隊長の部下達であつたので、我慢した。

「すいません、お兄さん方……」

「ん、なんだあ？おい気持ちわりいからこつち見んな。床でも見てる。口も聞くんじゃねえ。」

女隊長の言葉が少し気の迷いを起こさせていたのだろう。やっぱりこの容姿でも自分について分かつてもらえれば仲良くなれるのではないだろうか。勇気をだして仲良くなるために話しかける。

「僕は人間です。竹下吉雄といいます。」

「ああ？豚が何かしゃべってるぜ、ひやはは」

「だから黙ってる、声も気持ち悪いーんだよ」

「そうですか。残念です。でも僕も決心が付きました、ありがとう

「ごきました。」

目に涙をにじませながら念じた。

「豚になれ」

「ブツ・・・ブヒヒ!？」

（あれ・・・なんで豚になってるんだ!？）

「ブギイ!・・・ブヒイ!!」

（ヒイイ!・・・戻してくれえ!!）

「なら隆二が王宮のどこにいるか教えていただけますか？」

「ブヒヒブーブヒヒー!!」

（救世主様なら東棟の最上階にいる!!）

「なるほど・・・東棟の最上階ですね、分かりました。ありがとう

ございます豚さん」

「ブヒ!ブヒブヒイ!」

（ほら!教えたんだから元に戻してくれ!）

「ブヒイブヒイうつせーんだよ!豚の言葉なんて分かるわけねーだ
ろ、せいぜい豚人生楽しむんだな!」

遠のくうるさい豚供の鳴き声の中、更に奥へと進んだ。

豚供と別れた後、すぐに僕はリュウジとウリフタツの肉体へと組み
替える。

「あいつと同じ顔とか虫唾走るけど・・・仕方ない」

「あ、リュウジ様!このような所に!ささ、そろそろお昼ですので
東棟に戻りましょう」

僕を隆二と思ったメイドが話しかけてくる。

「うん、分かったよ。それじゃ案内してもらえるかな？」

「はい、もちろんです！このアリス・ルーデルンがご案内いたします」

頬を染めうつとりしながら、僕の少し斜め前に寄ってくる。

このアバズレが……。メイドの態度を見て悪寒とともに鳥肌がたつた。

隆二の部屋に向かいながらメイドと話をする。

「ところで……リュウジ様？」

「なんですか、アリスさん。」

「次は……いつ呼んでいただけののですか？」

顔を真っ赤にし、モジモジしながら聞いてきた。

「なんのことですか？」

「もう……おとぼけになって。いつもミリアリア姫様とミネルヴァ様がリュウジ様を

独占なさって、私いつ夜に声をかけられるか、いつもいつも心待ちにしているのですよ！」

その話を聞いて背筋が寒くなった。隆二はどこまで手を出しているんだろうか。城中の綺麗所

全員と関係持つてるんじゃないだろうな……。

「さあ、お部屋に着きましたよリュウジ様！」

扉を開けるアリス。

部屋の中のリュウジとミリアリア姫、ミネルヴァが目を見開く。

部屋の中の空気が何かおかしいと思ったアリスが中を見る。

「え……リュウジ様が……2人……？」

そして僕は不敵な笑みを浮かべながら隆二に言う。

「よお・・・偽者さんよ!」

脱獄（後書き）

いきあたりばったりで書き出したため、女神を殺したあとどう展開したらいいものか悩みまくりでしたw

1・隆二を放置してギルド登録

お尋ね者になっているから容姿変更。ただし力がかなり制限されて

元の姿に戻らなければ本来の力は発揮できない。

2・女神を殺した影響で自分の姿が女神と瓜2つに！TSもの。

そして牢獄の隣の部屋にいたバーコード頭のオッサンが実は聖アークティア王国の敵対国ヴィルヘルム帝国の騎士様で、王国から抜け、帝国に行きその人の娘となり学生編スタート！

3・そのまま王宮になぐりこむ。

の3ルートがありました。

1ルート・2ルートともに日和った話になっていったので没にし、

3ルート目、王宮に殴りこみだゴルアになりました。

しかし女つ気のないのも味気ないかなあと思い、女隊長をつけたしてみました。

さてさて、本物の隆二君はどうなってしまうのでしょうか！

4話に続きます。

偽者（前書き）

PVが・・・6000超えてるよおっかさん！
お気に入りも25件に・・・！

ありがとうございます！！

今回少し日和ってしまった感がありますが、
お時間あればお付き合いくださいませ。

偽者

「よお・・・偽者さんよ!」

目を見開きながら、固まる隆二、王女、女騎士団長にメイド。

「な・・・本物は俺だ!どうせ魔族が俺に変装して来ているんだろ
う。」

「むむむ・・・だがこうもそっくりでは、どちらが本物のリュウジ
様か区別がつかぬ・・・判定機もいつのまにかどこかに行っている
し・・・」

「大丈夫ですよ、ミネルヴァ。真実の女神様を召喚すれば一発です
!魔族ごときが変装していても一発で解除できますわ。」

「さすがだな、ミリアリア!よろしく頼む」

「ええ、リュウジ様のためにありったけの魔力をこめてこの無礼者
の正体を暴きますわ!」

ミリアリアの足元に魔方陣が展開されロングのさらさらした金髪が
ふわふわと揺れる。

「真実の女神”エイシア”我が招きにこたえよ!”召喚”」

”なんじゃ・・・妾を呼んだのはお主か?聖アーケティア王女ミリ
アリアよ。

あの高慢ちきな奴の後釜を据えるまで、業務が溜まってしまつて大
変なのだぞ?”

ミリアリアの召還に応じて、シャギーの入った肩先までの焦げ茶色
の髪、菊をあしらったヘアピンで前髪をとめた少女が、腰に手をあ
てながら出てくる。

「申し訳ありません、エイシア様。現在、救世主様の姿を模した不
埒者が姿を現し、どちらが

本物か判断がつきませんで・・・。救世の女神様は最近お呼びして
も出てこられませんし・・・。」

「ふむう……」

偉そうに隆二と僕を見やるエイシア。そして僕のところでは目をとめ、目を見開く。

”き、きき、きさまは……”

震えだす女神様。

（分かるの？）

できるか分からないが念話を送ってみる。

（わ……わかります……）

ビビりまくっているのか話し方が変わっていた。

（解けないと思うけど、もし解いたら分かるよね？運命の女神（名前忘れた）と同じように

北斗神拳的な消滅をさせてあげるから。悲鳴は”ひっ！！ ひでぶっ！！”に決定）

（ヒイツ、勘弁してください……そもそも私の魔力ランクじゃ貴方の構造組換を元に戻すことできませんし、ベリアースちゃんみたいに死にたくないです……それにそれは女の子にさせる悲鳴じゃないです……）

（仕方がないなあ、それじゃあ”あわびゅ！！”にしてあげるよ。）
（……それもいやです……）

「どうなさったんですか、エイシア様？どこか調子でも悪いのですか？」

狼狽するエイシアを不審に思ったミリアリアがたずねる。

「む……なんでもないぞ。大丈夫じゃ。（ううう、どうしたらいいのじゃあ……）」

エイシアが困っているようなので彼女に対して僕は指示を出した。

（どちらかが竹下吉雄が化けている。しかしどちらが偽者かは分からないが、2人を戦わせれば分かるって言うて）

（むむ、それは良い案じゃのう。分かったぞ！）

「最近忙しくて調子が悪くてのう、どちらかが竹下吉雄に化けているのは分かるのじゃが、

どちらが偽者かは分からぬのじゃ。しかし、救世主は魔王を倒すことのできる唯一の者じゃ。

2人を戦わせれば一目瞭然じゃろう。」

「なるほど！それは名案ですね。リュウジ様であれば、あの醜い下賤の者など一瞬で倒されてしまう

でしょう！」

「ええ、私もリュウジ様があの気味悪い生き物を駆除するお姿を見たいですわ！」

「そういう事なら仕方ないな・・・観客も呼んで皆に楽しんでもらわないとな！」

僕を晒し者にして楽しむつもりなんだろう。

「別に俺も構わないよ。沢山呼んできてくれ。」

そしてお前の恥ずかしい姿をたつぷり楽しんでもらうといい。

【救世の日 運命の刻 闘技場において救世主様による不埒な救世主を騙る偽救世主への断罪を行う。

観戦自由。我らの救世主の雄姿をご覧あれ！ 聖アーケティア王

国 王女 ミリアリア】

チラシが城下町に貼られ、ばら撒かれる。

『キヤー！！リュウジ様』

『救世主様、がんばって』

宣伝のため街中を周る隆二は街中の女達の声に手を振ってこたえていた。

背筋のゾツとする黄色い声を浴びるのが嫌だった僕はロープを目深に着、城下町の飲食店でメニューを眺めていた。

（おい、ヨシオ。おぬしが本当の救世主じゃろうに何故こんなことになったのじゃ？）

誰にも見えない状態で手乗り状態となったエイシアが僕の肩に乗りながら問いかける。

（んー、僕の姿は元々チビでブタでブサイクでさ。一緒に隆二と召還されたんじゃ、僕は救世主には見えないでしょ？隆二も隆二で能力値がA+だったから救世主だって勘違いされたってわけ。）

（ふむ・・・外見は確かに大事じゃが、本質を見抜けないようではのう・・・。

あのベリアーセもどうせ外見にウツツを抜かして隆二を召還してきたんじやろう。女神失格じゃな。）

（ところでエイシアさんは、どうして僕について来てるの？天界に帰れば？）

（うぐ・・・連れないのう・・・。本来は救世の女神がお主について回る予定だったのじゃが、最高神に後釜決まるまで変わりをせよと言われてな。お主の話相手・相談役をするから、よろしくじゃ。）

（うげ・・・あんなのが着いて回る予定だったのか。僕自身もそうだけど、紫ツインテも救世の女神として人選ミスだろ・・・。まあエイシアは僕の話聞いてくれるし良いかな。こちらこそ宜しくね。）

（ベリアーセの名前くらい覚えてやれ・・・まあ、あやつについては妾も同意見じゃが、お主については別に人選ミスだとは思ってはあらんぞ？）

（・・・嬉しいことってくれるじゃないの。）

（うっほ、いい救世主・・・って妾に何を言わせるのじゃおぬしは

！)

「おばさん、このベウフレテーっていうのください。」

「あいよー！そういえばお兄さんもリユウジ様を見に来た口かい？」

「・・・ソウデスヨ」

「あの方は本当に女の子達に人気でねえ。荒くれ者の男達が不満を言わないのが不思議なくらいだよ。」

はい、ベウフレテーお待ちどうさま！」

「・・・ソウナンデスカー。ところで彼が着てから犯人が不明の犯罪とかは増加していませんか？」

「ああ、不思議なんだけどさ、救世主様が街にくるようになってから犯人の分からない犯罪が増えてるみたいだねえ。女の子も時々いなくなったりとかするみたいだし・・・。救世主様のイメージダウンをさせるために魔族が街の住人に化けてまぎれこんで、やってるんじゃないかって噂だよ。今回の偽者の件もあるし、早く救世主様に魔王を討伐してもらいたいねえ。」

「ふーん。」

荒くれ者達を隆二がまとめて、犯罪行為をさせているんだろう。女の子がいなくなるのも隆二に寄ってきた女を食った後、荒くれ者達にまわして・・・。相変わらず吐き気のする野郎だ。

(エイシア、ベウフレテーの400リユネのリユネってどういう単位なんだ？)

(まさかヨシオ・・・お主、無銭飲食か？ 1リユネが銅貨1枚、1万リユネが銀貨1枚、10万リユネが金貨1枚になっておる。)

(わかった、ありがとう。この世界のお金召喚！)

空だった布袋が一気に400リユネ分に膨らむ。

(え・・・えー？・・・セオリーとしてはギルドで働くのでは・・・？とどこから

召喚したんじゃ？)

(隆二の財布。)

「おいしかったよ、おばちゃん。お代、ここにおいていくからね」
「はいよー、また来てね！」

（ところでエイシア、救世の日 運命の刻っていつになるの？）

（お主の世界で言うところの明日の正午じゃな。お主が負けること
はないじやろうが、まあがんばれ。）

（ああ、隆二に生き恥かせてやるぜ！）

（そ．．．そういう意味でいったのではないのじゃが．．．）

偽者（後書き）

いかがでしたでしょうか。

感想も2件もいただいてまして！

嬉しくて手がふるふる震えましたwありがとうございます！

主人公の理解役が欲しいと書かれていましたので

追加してみましたがいかがでしたでしょうか。

次の5話で隆二との決着！！になるといいなあ

といきあたりばったりで書いてる作者でした。

貧困（前書き）

すみません！また寄り道してしまいました……。決戦はもう少し後に

なりそうです。申し訳ありません；

他の方の書いてる小説があまりにも楽しくて、私も何か書いてみたなという不純な動機で計画もなにもなく書き始めたこの小説ですが15000PV到達、お気に入り数66です！ありがとうございます！す><

P・S 今回の冒頭の、空袋云々は前話の後半に少し書き足したものです。

こういう事が時々あると思いますが生暖かい目で眺めてやってください！

貧困

「うーん、宿はどこにしようかなあ」

（ふむ、城でよいのではないか？あそこならふかふかの布団にいいご飯がタダでついてくるぞ？）

（隆二との決着がついたら住もうかな。今はこの街の観光をしてみたいんだ。）

（なるほど、異世界から来たお主には珍しい物も多かるう。まあ妾はどこでもよいがのう。ベリアーセならふかふかの布団においしいご飯じゃないと嫌じゃあと駄々をこねておるだろうが……。）

街中を悩みながら歩いていると、どん、と体に軽い衝撃が来る。

「ごめんねローブの人！」

「……。」

ぶつかってきたボサボサの髪に質素な服を来た少し痩せ気味の子供が通り過ぎ裏通りに入っていく。

（ヨシオ、あの少女……。さっき食堂の外でお主をじっと見ていた子じゃな。）

（うわ、クソ！財布がわりの袋盗まれた。幸運の数値がFランクなだけあるな……。）

（別に空の袋くらい取られてもよいではないか。恐らくいくらでもお金が出てくるマジックアイテムとも思われたのじゃろうな。）

（んー、しかし聖とか国名の頭につくくせにあんな子供がスリしてんのか……。気に食わないな。）

そうやって僕はカメレオンのように体を周囲に擬態できるよう念じた。

（あの少女をつけるのか？お主の事じゃからダンボールでつけるのかと思うたわ。）

（性欲をもてあます。）

（お・・・おいまさかとは思うがもしやお主、ロリコンか？）

（冗談だよ。僕はガチホモだから。）

（な・・・なんじゃと・・・！！）

そっついながら頬を染めながら自分の身を抱きしめるエイシア。

（いや、お前女だろ？安心してくれ、僕は普通に女が好きだし、同じ位の年の子が好きだ。でもまあ相手にはされないけどね、あはは。）

（・・・・。）

頬を染めながら黙ったままのエイシアに、僕の顔は凍りつく。

（ま・・・まさか・・・？）

尋ねるのが恐ろしくなった僕はそのまま少女を追う。気まずい空気の中、あとをつけていた少女が建物の中へと入っていく。

（ん？あやつ、この建物に入って言ったぞ・・・結構広いがぼろっちいのう。）

扉の前に立ちノックをする。

「すいませーん、少しお尋ねしたいことがありますて。」

そして控えめにドアが開く。

「あの・・・返済のほうはもう少し待っていただけないでしょうか。」

長い赤茶色の髪を後ろで束ねた少女がでてくる。貧乏なのか継ぎは

ぎの多い服を着ているが
凜とした雰囲気をした子だった。

「僕は借金取りじゃありませんよ」

中を覗くと、沢山の子供達が僕を見ていた。その中で1人の子供が僕を見て小さく悲鳴を上げて机の下に隠れる。

（孤児院のようじゃの……。しかしこれほど貧乏とは……。国は何も支援をしとらんのか？）

「僕の財布をすっていった子をつけていたらここに入っていくのを見まして。今、机の下に入った子なんですけれど。」

「ま、ま、まあ！それはすいません！こら、リース出てきなさい。」

「エリカお姉ちゃん、財布っていうけどこれ元から空の袋だったもん！リースそんなに悪くない！」

「そういう問題じゃありませんっ！あれだけ悪い事するなっついてるでしようー！」

「うう……。うわああ〜んわああんっ」

腕をひっぱられ、泣いているリースを見かねた僕は、2人の前に行こうとする。

すると目の前にいかにもガキ大将っぽい男の子が立ちふさがる。

「ま、待ってくれ！俺がリースに無理矢理させたんだ。殴るなら俺を殴れ！」

そっぴいながら僕を睨む。僕は手を少年のほうに伸ばし……

「くるなら来……。ふえ？」

頭を撫でられながら素っ頓狂な声を上げる少年を見ながら頭を撫でる。

「お前、いい奴だなあ。僕の名前は・・・>リュウジくっっていうんだけど君の名前は？」

「>リュウジく・・・？お城にいう救世主様と同じ名前だ！俺はレイン。ところで、なんで俺を殴らないんだ？」

「確かに盗みは悪いことだけど、レインがカッコいい所見せてくれたから許すよ。」

ニツと僕はレインに笑う。ローブを被っているからあまり表情は見えないだろうが、雰囲気は伝わったみたいだ。泣かせてしまったり、スを抱きながらあやすエリカがこちらを見て申し訳なさそうに微笑む。

「あ・・・あの・・・お詫びに豪華なものはありませんが晩御飯一緒にいかがでしょうか？」

「ごめんなさいおにいちゃん、一緒にご飯たべよ？」
そういいながらリースが空袋を渡してくる。

「>リュウジく、今日は泊まってけよ！」

「うん、そうしようかな。今日はここでお世話になるよ。」

その声をかわきりに子供達がわらわらと集まってくる。

なんか痛いぞ……。子供達が僕によじのぼりながら関節技をかけってくる。

「いたっ・・・痛い・・・痛いから！」

（懷かれてしまったようじゃのう・・・ふふふ）

（ちょ・・・笑い事じゃないから！耐久Dの僕にはつらいです！！
イタイイタイ！でも・・・こんなに他人と触れ合うなんて初めてだ

からさ・・・嬉しい。」

僕は目を潤ませながら苦笑する。

（うむうむ。）

そっぴいながら嬉しそつに微笑むエイシヤ。

（でも、僕の元の姿をみたら皆・・・。）

目に溜まつた涙がこぼれて頬に伝う。嬉しくて出た涙なのか悲しくて出た涙なのか僕にはよく分からなかつた。

『いただきまーす！』

「やつたあ今日はいつぱいあるよあー！」

「えへへ、このスープお肉ある」

「・・・。」

一応想像はしていたが、ここまでとは思わなかつた僕は啞然とした。食卓には10cmくらいのフランスパンのようなものが1つに、小さい肉の欠片が1つ浮いたスープが浮かんでいる。

「あの・・・すみません、これが精一杯でして・・・」

エリカが僕の様子を見て、怒っていると思つたのだろつか謝つてくる。

「ん・・・誤解させてごめんね。別に君達に怒つてゐるわけじゃないんだ。」

そっぴいながらテーブルに料理が出てくるように念ずる。

ポン！ポン！そんな音を立てながらテーブルに次々と料理がでてくる。

「わあ！！見たことないような料理がいつぱいでてきたよー」

「ねえ、おにーちゃんこれ食べていいの？」

「うん、遠慮せずに食べてね」

きやつきゃつと喜ぶ子供達。

「リ・・・>リュウジくさん・・・これ・・・」

目を見開きながらエリカが尋ねてくる。

「僕は魔法が得意でね。ちよつと料理を召喚してみたんだ。」

「りよ・・・料理を召喚・・・？」

（もしや・・・隆二達のご飯か・・・？）

（イグザクトリー、その通りでございます。）

「ところで>リュウジくさん、その黒いローブ、ご飯の時でも外せないんでしょうか。」

「顔にひどい火傷があつてね。あまり見せたくないんだ。」

「すいません、不躰な事を聞いてしまって・・・。」

「いいって、気にしないで！ほら早く食べよう！」

子供達のベッドの感触をフカフカに変えてから、僕も床につく。

「おやすみ、エイシャ。また明日もよろしく頼むよ。」

”うむ、任せるがよい。おやすみヨシオ”

子供達と遊んで疲れていたのか、すぐに睡魔が襲ってきた。

貧困（後書き）

感想も一気に4件もいただきまして・・・誠にありがとうございます！

話を膨らませようとしてどんどん日和っていつてますが、面白いのかなあ・・・。どうなんだろう。よくわかんないなあ・・・。って感じで

疑心暗鬼になりながら書いてますので、こうしたら面白いと思うなど感想ありましたら宜しく願います！！

憤怒（前書き）

R15的な感じですよ。

嫌悪感を感じる方は飛ばすのが吉かもしれません。

前話が字数制限でひっかかったため分けております。

憤怒

”起きよ！早く起きよ！ヨシオ！”

ユサユサと揺すられ僕は目を覚ました。

「どうしたんだ？まだ暗いじゃないか。」

”さきほど男が1人来ての、その男と一緒にエリカが外にでていったんじゃ。気にならぬか？”

「……。追跡するぞ。」

しばらくすると、立派な屋敷の立ち並ぶ住宅街に2人は入っていく。

（ふむ……貴族街か……）

（……。）

「よし、この屋敷だ。」

「ほ……本当に私が体を買えば孤児院の借金は帳消しにしてくれる、ミミル達にも会わせてくれるのね？」

「ああ、約束するぜ。ほら、早く入れ。」

（身売りとはなんとむごい……）

（屋敷の中に入るぞエイシア。）

僕は周囲に擬態しながら2人にピタリとついていく。

一面に敷き詰められた赤い絨毯にシャンデリア。中央にある階段の手すりにもたれながら仮面をつけた男がこちらを見ていた。

僕はその男の顔を見て齒ギシリをする。

「ご苦労様、ギース。こんにちわ、お嬢さん。」

カッン、カッン、と音を響かせ階段から下りてくる。
(間違いない、あいつは・・・隆二だ。)

隆二はエリカの前に立つと、彼女の顎を持ち上げる。

「ふむ・・・中々の上玉だな・・・。よし浴室へと連れて行け！」
「ま・・・待って！その前行方不明になってた、ミミル達にあわせてください。」

エリカの言葉に、隆二は楽しそうに微笑むと、指をパチンとならす。

ジャラ・・・ジャラ・・・

あられもない服に首輪をつけ上気した頬でリュウジを見つめる3人の女達が出てくる。

『お呼びでしょうかご主人様』

驚愕に目を見開くエリカ。

「な・・・なにしてるの・・・ミミル・・・クーリオ・・・メリル・・・。人攫いにさらわれた所を助けられてここで給仕をしてるんじゃ・・・。それにマリスはどこにいるの？」

「ええ・・・”給仕”よ？ ふふ、貴方もご主人様のために私達と一緒に尽くしましょう？」

「とっても幸せなんだから・・・」

「でもあんまり粗相をしすぎると、マリスみたいにギースさん達専用の玩具になってしまうわよ？」

「ひ・・・ひい・・・」

行方不明となつたいた孤児院の友達の異様な変わりように怯え、あ
とずさるエリカを逃がすまいと羽交い絞めにするギース。

「君も僕のために尽くしてくれよ・・・ハハ・・・グエツ・・・」
僕は我慢できずに隆二を殴っていた。一応手加減して殴ったが気絶
で済んでいる所はさすが能力値A+。

「貴様！いつの間に！」
剣を抜き放ち、僕に飛び掛ってくるギース。魔力で体を強化し拳で
そのまま剣を殴りぬけて破壊し、そのまま上半身を粉々に殴り吹き
飛ばす。

「>リュウジくさん！」

エリカが涙を浮かべながら嬉しそうに僕を見る。

「エリカ、僕の手を握って！逃げるよ。」

「は・・・はい！でもミミル達が・・・。」

（・・・エイシャ。）

（安心せいヨシオ。本物のリュウジのほうは恐らく固有スキル魅了
Sランクによる洗脳のようなものじゃ。これを解除すれば、元に戻
るじやろう。別にお主がおそれているような大幅に記憶や感情を改竄
するようなものではないから安心せい。）

そして僕は隆二によりそう3人を眠らせ、残りの一人も救出し、孤
児院へとつながるよう空間に穴を開けた。

「こ・・・怖かったです・・・ひぐつ・・・えぐつ・・・。」

孤児院に戻ると、エリカが僕に抱きついてきた。生まれて初めて感

じた柔らかい感触に衝撃を覚える。

しかし、元の姿の僕であればエリ力はきっと抱きつきはしないだろうし逆に嫌悪するだろう。

エリ力を引き離し、さきほどのエリ力の記憶を封印し、いい夢を見ながら眠るように念じた。

「くう・・・くう・・・むにや・・・。えへへ・・・。」

僕にもたれかかるように寝るエリ力を持ち上げ、ベッドに寝かせた後、ミミル達の洗脳の解除、一部の記憶を消し僕も自分のベッドに戻る。

「ふう・・・疲れた・・・。明日は隆二との決戦かあ。」

（お疲れ様じゃ、ヨシオ。ゆっくり休むがいい。）

（今度こそおやすみ、エイシア）

そして夜が明ける。

憤怒（後書き）

そして次こそ決戦です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482j/>

異世界召喚モノ

2010年10月10日18時23分発行